講話

幼児の心理

—3—

お茶の水女子大学教授
波多野完治

第三講　自己中心性

子どもは、前回にのべたように、一才半ごろ、品物や人物について「恒常性」の観念を獲得する。すなわち自分には見えていなくても、品物は存在することがあるし、人物は今いなくてもそれはなくなつてしまつたのではないということがわかつてくる。

こういう恒常性は勿論自分にも適用せられるわけである。小さい子どもは欲望のまにまにうごいている。いわば欲望があるから赤ん坊があるのだ、といつてもよい。だが品物が永続するように母親は今いなくても、又現れてくるのと同じように「自分」も欲望とは別に永続するのではないか。こういう「感じ」が二才半ごろに成立して、それが二才半ごろの「自己主張」又は「反抗」という形になる。

この感じは、いわば自分の身体を中心とする、自分のまとまりの感じである。自分だけについての、感じである。この感じが世界の中でどういう位置をしめるものか、それは他の品物や人物に対して、どういう関係に立つかこういうことはまつたくわかつて来ていない。子どもはこれからそのようなことを学んでいくのである。

この学びの中途に出てくるのが「自己中心性」である。

だから自己中心性は「自己」の感じがだんだんはつきりして来、こまかく分化してくるが、しかし、それが他の人物や、他の品物との関係の意識にいたらない状態といつたらよいであろうか。

いや、他の人物や、他の品物との関係の意識、といつただけではたりない。子どもだつて他の品物や他の人物の意識はもつているのだから。子どもの場合には、その「他の品物」へ他の

人物が凡て自己との関係においてのみ把握されているのである。

そこで

(1) 品物同志の関係、人物同志の関係などは意識にのぼらない。

(2) 自分の品物、人物に対する関係はわかつているが、逆に、品物の方からみると、自分はどういうことになるか、他の人物の方からみると、自分はどういう向になるのかはわからない。

こういうことが出てくる。この二つの事が出来るようになることをピアジェは「相互性」RECIPROCITEというのであるが、幼児はこのような相互性をもたず、これを学んでいきつつあることを特徴とするのである。

だから幼児は

「彼のたましいはいろいろな事物の中心であり、事物は自分との関係においてのみ存在するし、自分のパーマペクティヴ（見地）からのみ世界がまとめられ、統一を得ている」

といえるだろう。

こういう傾向は三才から七才ごろまでつづくが、五才のころが一番つよい。つまり五才のころに自己中心性の頂点があるわけである。

だから子どもにとつては、「自分」が大切なものなのだ、ということがわかつて来ている。自己は世界の中心なのである。自分があるから、世界がある、といつてもよい位である。物の見え方一つをとつても、自分があるいていくにつれて、今まで「前」にあつたものがうしろになつていく。自分のあるき方で物の「ウラ」がみえる。

だから自己中心性は「自我」の発見の結果である。当然それは「自分を大切にすること」を含む。だがこれは利己心とはちがう。子どもはまだ自分を他人の中において、他人と比較し自て分を愛しているわけではない。彼はやつと生存の秘密をさとつたのだ。自分の恒常性を知り、自分が「特別」なものである、ということを感じたのである。

これは勿論利己的に見える行為を生んでくる。しかし利己的な行為とならんで、子どもは利己的でなく行為もするのである。

母親が自分をおきざりにした。

ワーッ、ワーッ。

となく、というようなことは、満四才ごろによくあることである。母親に何かわけがあつて出かけたのだろう、というような、他人の立場の理解はない。だから、これは子どもの身勝手と解されがちであるが、後にのべるように、これは「ワーッ」となくことにより自分の力をためしているのである。だからやたらにしかつても「後おい」はなおらない。

自己中心性はどんな形であらわれるか。

それはまず**第一に**「**絶対主義**」という形になる。

絶対主義というのは相対主義の反対で、つまり物と物との関係がわからない、ということである。

よい、わるい、ということについても、子どもはそれを絶対化してしまう。よい人はあくまでもよく、悪い人はあくまでもよい。よい人でも、いくらかわるいことがあり、又悪い人でもいくらかよい点がある、というようなことは、子どもにはなかなかのみこめない。

こういう風に、二つにはつきり分けてしまうことを**ディコトミー**というが子どもの考え方はまさに「**ディコトマス**」なので、函数的又は機能的でないのである。

左右というようなことについても、左はどこまでも左で、右はどこまでも右だ左はもつと左のものから見れば右であるし、右ももつと右のものからみれば左になるのだが、子どもの考え方にはそういう余地はない。

ところで、その、左や右をきめる標準、そのもとの点（原点）どこかといえば、それが「自己」なのである。

自己を中心として左や右をきめるのである。自分の方からみれば左であつても、自分の反対の側の方からみれば「右」になる。これを理解するのは「相対主義」であつて、「視点」又は「原点」を移動させて、これとの関係で物を考えるわけである。これはAのものをBの立場から考えると同時に、BのものをAの立場から考えることを可能にするので最近の学者はこれを「観点の相互性」といつている。全体と部分、社会と個人など、いずれもこのような観点の相互性を入れてこなければ理解の出来ない現象である。こういう観点の相互性は幼児には全く意識の他であつて、いくらいわれても全然考えの中にない。

考えの中にないので、したがつて、自己の観点の意識もない。つまり、自分はこれこれの視点を標準にとつているのだ、という意識さえないのである。もしこういう意識が少しでもあればそれは観点の相互性の第一歩といえる。

幼児にはこういうものがないから、そこで子どもは、物を自己との関係において考えていながら、しかもこれを「自己との関係」において考えているので、其さえおもわない。そこで、物を「あるがまま」にみている、ということがおこつてくる。

あるがままにみる、というのは、物を現象通りにうけとる、ということである。これを学者は「**唯現象論**」となずけている。

自分があるくと月はついてくるようにみえる。しかし、自分のかわりに他人があるいたらどうだろう。こういうことは子どもの心に疑問となつてうかばない。自分があるけば月はついてくるもの、という、現象そのままが信念化している。これが唯現象論である。

このような唯現象論はピアジェによれば幼児のときの方が赤ん坊のときよりつよい。なぜなら赤ん坊の時代には外界の現象は全て「絵」であつた。そこには「物の恒常性」はなかつた。だからそこでは「絵」のかわるごとに物の変化があつたわけである。これに反して幼児の時代には、

月
太陽
父
母
兄

等が、それぞれの永続的な意味を得てきている。したがつて、その「物」の法則性がそのまま承認されて、唯現象的に把握されることになる。

このように、絶対主義と唯現象論とは並行している。事物は「自己」との関係のみでむすびついているから、唯現象論的なのである。

自己との関係でなく、事物と事物との関係がつかめるようになれば、今まで自己の中介によつてのみむすびついていた、ABCD等が今度はおたがいにAB、AC、AD等々として関係しあうことになる。

そうなると、唯現象論もなくなる。唯現象論は、自己が、事物のなかで特権的な、排他的な位置をしめているためにおこつてきているものなのである。

第二の形は「**アニミズム**」である。

アニミズムは子どもが事物に自己と同じような精神、自己と同じような意識、又は自己と同じような「思考」の性質を賦与することであつて、これは子どもが「事物」についてその恒常性永続性、又は同一律的性格（AはAである）をみとめてはきたが、まだ、そのAが自分から子どもとちがつたものだということをつかみ得ないためにおこつてくる現象だ、という風に定義することができる。だからブールジャード（BOURJADE）は、アニミズムについて、次のようにつている。

「アニミズムというのは、リボーやフロイドの考えたのとは丁度反対の現象である。リボーやフロイドは、アニミズムを「投出」の作用と考えた。即ち主体がまず「自己意識」をつかんで、次にこれを類推によつて、他の事物や存在に、自己のうちにみ出される現実形態をおしかぶせる作用であり、したがつて、第二次的作用であると彼等は考えたのだが、事実はそうではない。それは類推的

転移にもとずくものではなく又この現象がおこる以前に、主体と客体とのはつきりした区別に到達しているものでもない。アニミズムは全く逆に、主体と客体との区別がはじめ存在していないことのあらわれなのだ」

こんなわけで、幼児は自分のまわりにおこる事件を解釈し、説明する原理として、まさに自分の身のうちでおこつている現象を適用する、という点にアニミズムが成立するといえるのである。自分とは質的にちがつたものと考えないで、自分の通りのものとして、外界の事件や存在、人物を解釈すること、これが自己中心性のあらわれであることは言うまでもない。

アニミズムと関連して、自己中心性の第三のあらわれは「模倣」が著しくさかんになることである。赤ん坊のときには、模倣はしたくてもできない。多少でも運動能力がでてこなければ模倣の能力はない。だが、模倣は他人又は他のものと同じことをすることであり、これは自己中心性の反対ではないか、という人があるかもしれぬ。

そうではない。模倣は「自分」と「他人」との分化が不充分なことなのであり、つまり、アニミズムをひきおこしている同じ心的機構が、アニミズムと逆の方向に模倣という現象をおこしているのである。

赤ん坊は生後一ケ年から二ケ年のあいだに「感覚運動的適応」をまなぶ。オツパイはどういう風に吸えばうまく乳がでるか、手をどういう風に振ればガラガラは鳴るのか等を、赤ん坊はまなぶ。これはガラガラオツパイの性質上、赤ん坊の行動が強制され、規制され、一定の形をとつたものである。つまり外界の圧力が子どもの行動に影響をおよぼしたのである。

さて、赤ん坊は事物についてのこのような知を――それは感覚運動的適応として獲得されている――得た後、幼児の時代になると「社会」についての知を学ばねばならぬ。社会の知とは、父や母やその他の人々についての感覚運動的適応でもあるとともに、自分が社会の中でよい子として暮していくための「知」でもある。このような「知」が模倣、即ち他の人のやつたことをまねる、という感覚運動的適応なのである。だから子どもが幼児のときにきわめて模倣的である、ということは、一方からいえば子どもの心性のあらわれでもあるが、他方からいえば、それがあるがために、子どもは赤ん坊時代の事物に対する感覚運動的適応からさらに進んで、「社会」に対する適応を完成することができるのである。

人間の行為は精神的なものにせよ、肉体的なものにせよ、同化と順応、と

いう二つの方向にわけてみることができる。たとえば我々が米のめしをくうのは米を同化しているのであるが、同時に我々は我々の食欲を米に順応させているのである。

こういう過程は精神の方でもおこつているので、たとえば、子どもがヒコーキをみる、ヒコーキがヒコーキとして「知覚」されたときには、子どもはヒコーキを「知覚的に」子どもの内部に同化したのであるが、又そのとき、子どもは自己の行為をヒコーキをみるという一連のものに組織だてている。これは子どものヒコーキへの順応である。この二つの方向の行為があつて、はじめて「適応」（アジャストメント）がうまくいくといえよう。

ところが、子どもの模倣は、同化と順応の不整合の結果である。子どもは模倣する、即ち、順応している。子どもは大人の世界にうまくはいり込む。しかし、子どもは同化しない。同化の方は「自己中心的に」行われる。つまり、まちがつて、子どもなりに大人やその他の事物が解釈されているのである。

幼児の時期は、その自己中心性のため、順応はある程度まで進行するが、同化の方があんまりうまくいかない時期である。勿論、同化がうまくいかない以上、順応の方も最終的には「完全」というわけにいかない。子どもの子どもらしい行為は、このような順応と同化との不整合からおこつていることが多い。

それの大きなあらわれの一つは、子どもの「想像あそび」である。三才から四才にかけての子どもは「想像あそびが」大変すきである。想像あそびの特色は、ホウキが犬になつたり、又ウマになつたりして、他人につたわらない形での事物解釈が行われている点にある。自分だけがわかつているので、大人には、ホウキは犬には見えないのである。つまり、子どもの欲望のために、ホウキが犬に変形させられて、「知覚」されているのである。

更に、子どもが会話のやりとりができないこと、自分でおはなしをまとめてはなすことができないこと、自分のことについても、又他人のことについても「理由」を示すこと、つまり説明することができないこと等も、このような「同化」と「順応」との乖離、不整合に原因するといえよう。

さて、上の特徴から、幼児期の大きな行動上の性格が二つでてくる。

(1) かんしやく

第一はかんしやくである。幼児には同化と順応の不整合がついてまわる。つまり幼児は同化できないことについて順応を強いられる。いつも失敗である。いつも自分の意図と出来たこととくいちがつている。これでは子どもで

なくても「感情的」にならざるを得ない。で、ドベスというフランスの心理学者は幼児、特に幼児前期の心性を「混乱的」という風に特徴づけている。幼児は後期において、同化と順応との不整合を少くも部分的に克服する。即ち自分の意図を他人にのみこませ、他人を自分の意図にしたがわせたい、又他人の意図がいつも必しも自分の考えるところと一致するものではないことを把握する。こうなると自然にかんしやくもへつていくのである。

(2) 質　問

第二の特徴は質問である。これはかんしやくがおさまつてから特に著しくなる。つまり彼は幼児のとき感情的に処理していた混乱を、今は知的に処理しようと試みるようになる。疑問の形で大人にききそれによつて自分の意図とのくいちがいを解決しようとはかるのである。

ところで、言葉で質問し、言葉で答えてもらつて、それが理解されるためには、子どもは言葉をかなりの程度ものにしていなければならない。これが幼児前期の仕事であり、これについては後にくわしくのべるが、ここで大切なことは幼兒の言語發達は幼児の自己中心性を減少させるどころか逆にこれを増大するということである幼児は大人の言葉を理解するために、大人のつかう社会的わく、即ちカテゴリー（ハンチューと訳す）を自分のものにしなければならない。ところで言語の示す社会的わくは、合理的なもの許りとはかぎらない。

「おひさま」

「お月さま」

自然物に人格的な称号があたえられている。

「早く春が来るといいわね」

気候が人間のようになつている。

「海が鳴いてら」

これでは動物と同じだ。

言語のもつこういう社会的わくの中でそだつ子どもにはどうしても一時自己中心性、アニミズム、実在論等が強化されがちなのである。

保育応答研究会再開御案内

日時　六月二十一日(土)午後一時半より
（毎月第三土曜日。六月よりとりあえず向ふ半年間開催）

會場　フレーベル館講堂

講師　倉橋惣三先生

○皆様のお持ちよりになる保育の実際問題につき、倉橋先生を中心とした出席者一同で、互に研究しあう、新しい企画です。多数の御来会を、お待ちうけします。（来会御随意・会費不要）

昭和二十七年五月六日

株式会社　フレーベル館内

保育応答研究会係